



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.134  
2014.11.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 阿玉台式土器 - 東関東に花開いた特異な中期縄文土器 -

塚本師也

最終回

### 阿玉台式土器の分布

阿玉台式土器の研究は、雲母片を含む特徴的な胎土から追求する土器製作のシステムや土器と生業との関係など多岐にわたる問題を含むが、最後に研究史上多く取り上げられてきた分布について触れ、連載を終えることとしたい。分布図も示され(高橋1962、池田1982等)、東関東地方を中心として、東北地方南部から中部地方にまで及ぶことが判っている。しかし、細別時期ごと分布範囲が異なることは、あまり言及されていない。また、分布範囲内でも、阿玉台式のみで純粋に構成される地域、他の土器と組成をなす地域、他型式のなかで少数もしくは単体で存在する地域の違いがある。ここではそうした点を踏まえて、各時期の分布の概略を述べる。将来、同一時期の土器の形態・装飾の細かな地域差が明らかになれば、土器の製作単位や移動の問題に迫ることもできよう。

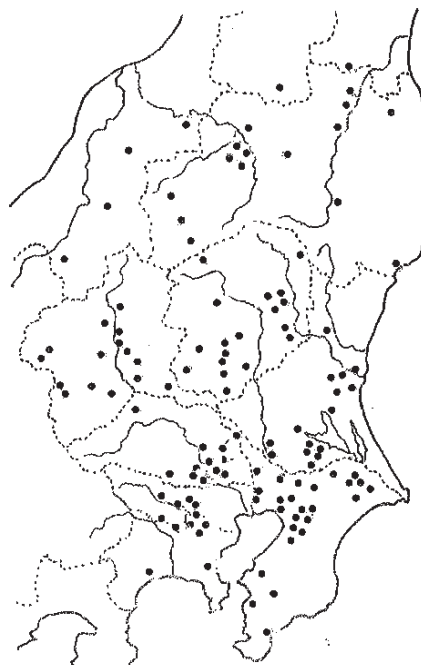
阿玉台Ia式土器は、広範に分布する。北は宮城県南部、山形県南部に及び、福島県域には良好な資料が多数存在する。勝坂式の分布圏である関東地方西部でも出土する。武蔵野台地では組成の中で占める比率が比較的高い。新潟県中・下越にも分布する。千葉、茨城、栃木の3県全域は、阿玉台Ia式が組成の主体を占めるようである。阿玉台Ib式土器の分布範囲は、阿玉台Ia式の分布範囲をほぼ引き継ぐ。中部高地での出土も目立つ。千葉県の下総台地西縁部では、組成の中で貉沢式が一定量存在する。阿玉台II

式土器も、やや狭くなるものの、阿玉台Ia・Ib式の分布範囲を引き継ぐ。茨城・栃木両県の北半部では、在地の大木7b式土器と組成をなすようになる。阿玉台III式期は分布範囲が狭くなる。東北地方、新潟県域、中部高地はほぼ分布圏外となる。関東地方南西部や群馬県域では、出土量が減る。阿玉台IV式期は更に分布が狭くなる。関東地方南西部でも激減し、群馬県域では殆ど出土しなくなる。茨城・栃木両県北半部では、大木式と組成をな

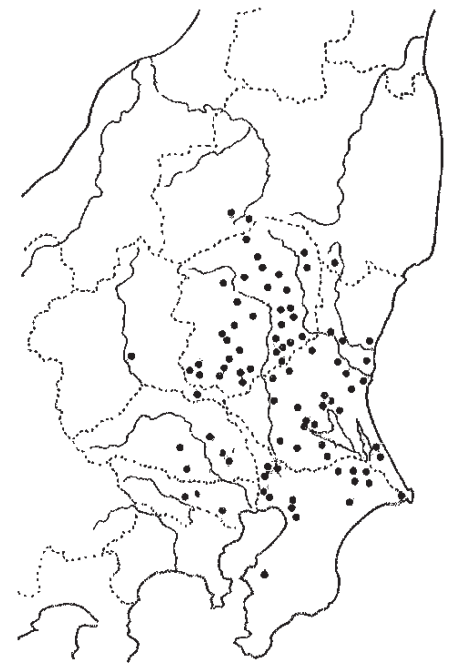
し、千葉県域、茨城・栃木両県南半部では、中峠式系土器と組成をなす。純粋に阿玉台IV式のみで構成されるのは、霞ヶ浦北岸の極狭い範囲のみとなる。阿玉台Ia式土器と阿玉台IV式土器の概略の遺跡分布図を示す(第12図)。分布範囲が縮小した様子がうかがえよう。

## [参考文献]

池田晃一、1982、「阿玉台式土器の分布とその問題点」  
『史学研究論集』第7号  
高橋良治、1962、「阿玉台式土器の研究史と問題の提起」  
『考古学手帖』16



阿玉台Ia式土器の分布



阿玉台IV式土器の分布

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

## 目次

■阿玉台式土器	阿玉台式土器の分布	塚本師也 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第127回)	林 勇介 …3
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第18回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	『博物館の害虫防除ハンドブック』	桑原安須美 …4

## 考古学の履歴書

## 良き師・良き友に恵まれて(第18回)

渡辺 誠

## 23. 榎崎先生とソフトX線撮影装置

榎崎彰一先生は助教授として私を呼んでくれた上に、少しでも早く名古屋大学と名古屋地域になじめるようにととても親切にして下さった。先生はとてもグルメで、うまい店もよく御存じであり、お供をさせて頂いた。こうしたことを含めて、もっとも感謝していることは、私の希望をかなえて下さり、ソフトX線撮影装置を研究室に備えて下さったことである。

これはソフトの名のとおり、X線操作の資格を必要としないもので、手塚山大学の堅田直先生は早くから導入されていて、私にもその必要性を教えて下さった。ただ問題は、費用がかかるということである。しかし研究上の必要性を当然とされ、購入して設置することに多大なご尽力をして下さった榎崎先生には、いくら感謝してもし切れないものがあった。その成果は『考古資料ソフテックス写真集』として、1986年3月に第1集を刊行し、以後毎年欠かすことなく、2000年3月に第15集を刊行して終えることになった。またその撮影については、明治大学の大学院修士課程修了後、名古屋大学文学部の研究生になった齊藤基生氏に、多大なご協力を頂いた。

このことによる研究のもっとも大きな目的は、鉄製釣針の研究であった。ソフテックスによってまわりのサビを透過し釣針の本体の形態を観察することであった。縄文時代からの鹿角製釣針は、弥生時代後期になると鉄製品へと変化する。しかしその大きさは鹿角製釣針のそれを踏襲し、細い針を曲げた1~2cmの小型品は、鎌倉時代になって登場することが明らかになってきた。現在のような溪流でのアユ釣りの始まりで、それ以前は網漁などによって捕らわれていたらしい。

またこれらに伴って、いろいろと分かってきたことがある。そのなかでももっとも興味深かったのは、サメ釣針の発見である。愛知県日間賀島の第5号古墳出土品には、鎖の一部が確認された。鋭いサメの歯で食いちぎられないように、現在でも釣り糸の代わりに鎖が使われている。そしてこの日間賀島をふくむ篠島・佐久島の三河3島からは、奈良時代には他の水産物とともに、スハヤリとよばれたサメの干物が平城京まで貢納されていて、それに伴う木簡が発掘されている。そのサメ釣りの釣針が実際にあったことが証明されたのであり、一時新聞上をにぎわしたりした。もちろん現在でも食べられている。

また本体も針も鹿角製の結合式の角釣針が、和歌山県から岩手県までの太平洋岸に分布し、とりわけ三浦半島や相模湾沿岸に多いが、これはカツオ釣り用である。鎌倉時代の『徒然草』のなかで兼好法師は、鎌倉ではカツオのような下賤な魚を食べていると書いているが、内陸の京都人のひがみみたいなものである。そしてこのことは、源頼朝が石橋山の合戦で負けたあと三浦半島へと逃げるに当たり、相模湾のカツオ漁師が大きく貢献したと考えられてくる。そして三浦一族などのその後の展開にも関わりがり、興味深かった。

すでに明らかにしていた縄文時代の釣針の、現代までの展開が明らかになってきたことは、私の志向する物質文化史路線の方向性を一段と強く意識させることになった。

## 24. 木の実の文化史

名古屋への移動の動機には、先にも記したがトチやナラの実などの民俗学的調査がひんぱんにできるようにということにあった。

榎崎先生の助手になっていた小沢一弘氏や、岐阜市の安藤正義氏には大変お世話になった。ことに年配の安藤氏は山間部の村々にも戦友がいて、その方々が貴重な情報源となって下さったことには、深く感謝している。安藤氏は、今度は先生に何を頼まれているのかと聞かれたりしたと、話してくれたことがあった。

この岐阜県下での調査によって明らかにできたことは、大きくまとめれば次の2点である。第1は、トチの実の食べ方には、栃餅の他にコザワシという方法があるということである。餅にするということはモチゴメと不可分なことであるから、米作以前の縄文時代には遡ることではない。しかし、縄文の遺跡からは実が出土するのであり、理解に困っていたが、米と見関係な食べ方が岐阜県の山間部には残っていた。それはコザワシとよばれているもので、アク抜きをした後、粉として加工して食べる方法であった。しかしこれはほとんど消滅寸前の方法であり、それを記録に残せたことはとても幸運なことである。教えてくれた年寄りはすでにあの世へと旅立っている。

第2は、コザワシのための装置が明らかになったことである。これには大量の水が必要であり、平たい箱状のものなかに、粉が逃げないようにサラシを敷き、長期間水を流し続けるのであり、豊富な山水がなければできないことである。このことは、後に各地の水さらし場遺構の発見と理解に大きく貢献することになる。また布についての理解から、アンギン(編布)の研究も促進されることになった。

はじめて水さらし場遺構が調査された遺跡は、栃木県鹿沼市の明神前遺跡である。この遺跡は同市教育委員会の永岡弘章氏によって丁寧に発掘され、遺構の底には網代が敷かれていることが確認された。なかで作業をする時に水を濁らせては意味がない。アクが抜けたこと、すなわちコーヒー色から透明な水に変ったことを確認できなければならないのである。水さらし場遺構の例は増えてきてはいるが、ここまで確認された例はない。

またドングリ類やトチの実の遺跡からの出土例についても、多くの先生や友人に教えて頂くことが多かった。これらは縄文時代には主食的なものであったばかりではなく、低生産段階の弥生・古墳時代には節米の補いであり、飢饉の時の救済食料でもあった。そのために現代まで伝わってきたのである。

## 略歴

昭和13年11月18日	福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月	福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月	慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月	日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。



## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 127

## シブノツナイ竪穴住居跡 ～ 北海道湧別町

林 勇介

## ○「シブノツナイ竪穴住居跡」との出会い

私が「シブノツナイ竪穴住居跡」と出会ったのは平成19年4月のことです。上湧別町（現湧別町）の学芸員となった翌春のことでした。

その竪穴住居跡がいまだに埋没しきらないものであることは書籍で見たことがあったので、現地に行くとともに確認できると思っていたのですが、最初の夏はすでに背丈ほどに育った笹藪に阻まれて一向に発見できませんでした。再チャレンジしたのが平成19年春のことで、その日は雪どけ後であり、草が生い茂る前の絶好のコンディションでした。その時撮影したものが紹介している写真です（写真①）。残雪により平面形がくっきりと



▲写真① 雪が残る竪穴住居跡の窪み 平成19年4月9日

見える住居跡と、視界を埋め尽くす圧倒的な数に改めて感激し、私の専門が擦文文化ということもありこの遺跡に仕事で携わりたいと強く思いました。しかし、遺跡があるのは隣町（旧湧別町）だったので、私が直接遺跡保護や活用をできない状況でした。

そんな状況が変わったのは平成21年10月のこと。なんと上湧別町と湧別町が合併し、新湧別町が誕生しました。それをきっかけに、上湧別町で埋蔵文化財を担当していた私がシブノツナイ竪穴住居跡も担当することになったのです。

初めてシブノツナイ竪穴住居跡を訪れた時の写真は、安物のデジカメで撮影したものでした。この遺跡が一番絵になるのはやはり窪みに雪が解け残っている姿。担当になったからには、ポスターや教材で活用できるいい写真を撮っておこうと意気込んだのですが、意外なことにこれが難しいものでした。まず、遺跡の雪解け状況がなかなか把握し辛く、その上業務の空き時間や休日撮影タイミングとなかなか重なりません。そんなこんなで公開用の写真には、今でも初めて出会った時のものを使用しています。

## ○擦文文化の大集落

シブノツナイ竪穴住居跡は、縄文文化から擦文文化という幅広い年代の住居跡が存在する大集落ですが、その大半は擦文文化のものと考えられています。擦文文化とは北海道で7世紀～13世紀頃に展開された文化で、本州の古墳文化でみられる土師器や平面方形で竈を有した住居構造などを北海道在地文化（続縄文文化）が取り込んで成立したものを指します。湧別町ではその住居跡は、冬季の積雪や年中海風が強いという環境のためか、本州や北海道他地域よりも土の堆積が遅く、現在でもその窪みが埋まりきらずに確認できます。

同様の竪穴住居跡群は北海道東部の常呂遺跡（北見市）や標津遺跡群（標津町）などの国指定史跡が有名ですが、湧別町がそれらと大きく違うのは竪穴住居跡群の大半が林の中ではなく、草地にあるという点です。そのため、インターネット地図で見られる航空写真でも竪穴住居跡の窪みがはっきり確認できます（あるサイトの航空写真は偶然にも春先に撮影されたようで、窪みの残雪状況も確認できます）。

## ○学術調査と北海道指定史跡

シブノツナイ竪穴住居跡の存在は、大正時代には郷土史研究家などに知られていましたが、遺跡の内容が具体的に分かったのは2度の学術調査の成果によります。

最初の調査は昭和38年、網走市立郷土博物館の発掘調査です。3軒の竪穴住居跡が発掘調査され、擦文土器が出土し方形の住居構造や竈が確認されたことで、この遺跡に擦文文化の竪穴住居跡が存在することが学術的に確認されたのです。

2度目の調査は昭和41年、北海道大学の長瀬利夫教授によるものです。2軒の竪穴住居跡の発掘調査が行われ、共に擦文文化のものと確認されました。また、この調査では竪穴群の測量調査が行われ、515軒の竪穴住居跡があると確認されたことも大きな成果でした（現在確認されているのは668軒）。それらの成果により昭和43年には北海道指定史跡となりました。

## ○郷土学習のスタート地点

シブノツナイ竪穴住居跡を知っているかと地元の方に聞くと、30～60代の方から「小学校の遠足で遺跡に行った。」などの返事をちらほら聞くことができますが、10～20代になると「知らないし、行ったこともない。」と言われてしまいます。小学校の副読本で遺跡は紹介されているのですが…。北海道の歴史学習は明治時代北海道開拓の約100年前がスタートになりがちです。それは、北海道民は明治時代の北海道開拓期に本州から移住してきた人の子孫が多いためです。しかし、北海道でも本州同様に、地域の歴史は遺跡が残された先史時代からあります。

湧別町にも「シブノツナイ竪穴住居跡」という先史文化の遺跡があり、その頃から地域の歴史が始まっています。そのことを多くの町民に知ってもらうため、平成21年の合併後、小中学校や教員の研修会、地域の学習グループなどに遺跡見学を働きかけ実施してきました（写真②）。その結果、「今まで知らなかったが地元ですごい遺跡があるんだね。」「遺跡が多いことは昔の湧別は多くの人々が住むくらい魅力的な土地だったの



▲写真② 竪穴住居跡を囲む町内の教員と私 平成26年7月30日

かも。」という反応が幅広い年代層から聞けるようになってきました。また、一年を通じた総合的な学習で遺跡を扱う学校も増えるなど、少しずつですが遺跡の存在や重要性を知ってもらえるようになった気がします。

#### ○今後の活用と整備

現在シブノツナイ竪穴住居跡は、北海道教育委員会が北海

道指定史跡について調査を行う「重要遺跡確認調査」の対象となっています。調査期間は平成26年～29年で、調査主体者の北海道埋蔵文化財センターとは調査の進め方について、私も現地担当者として関わっています。今後の活用や整備の充実のため、シブノツナイ竪穴住居跡と向き合う夢のような日々はまだまだ続きそうです。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは五十嵐祐介さんです。

## 考古学者の書棚

### 「博物館の害虫防除ハンドブック」

杉山真紀子著／雄山閣出版(2001)

桑原 安須美

本書は、博物館に存在しうる害虫、また資料保存の妨げとなる要因について、その特性と防除の方法をIPMの概念に基づいて紹介したものである。IPMとは、元は農業用語で、Integrated Pest Management (総合的有害生物防除管理)の略語である。化学的燻蒸などの有害物質を用いた手法を用いずに生物被害を防ぐ環境を整えるための方策である。

土器や石器がその大半を占めてきた考古学の分野においては、生物被害に対する防除管理は民族・民俗資料や文献史料を扱う分野に比して認識は甘く、近年有機質資料の増加に伴いその対応への危機感は増加しつつあるものの積極的な対策が未だ浸透しているとは言い難い。しかし、土器であってもキクイムシは穴を開けるし、カビや小動物の糞尿は一度付着すると除去困難となる場合も多い。保存箱が湿気や経年劣化により崩壊すれば資料の散逸を招き、さらに二次資料となる台帳や図面が虫食いなどで判読不能になれば資料の履歴喪失という被害をも引き起こしかねない。また、資料を収蔵する施設の内外環境、建材、空間構成等を考慮することも基本中の基本ではあるが、現実にはそもそもそうした文化財保管を目的とした構造ではない校舎などの廃施設を仮の収蔵庫として利用する例が全国各地に多数みられる。再利用施設となれば、建物自体を改修する予算がつかない場合が多く、空調どころか保管理は場合によっては簡単な鍵をかけるのが精一杯な自治体も多いと聞く。そうしたことから資料劣化の原因は多岐にわたることとなり、全てを把握することも解決することも困難な現状にある。発掘調査会社や研究機関にしても、出土遺物を整理分析し報告書を刊行するまでの期間、資料の全てを適した環境下に仮保管しておくには莫大な費用と空間の確保が必要となり、実現することはなかなか難しい。

本書には、実際に資料に害を及ぼす諸原因の種類や生態、繁殖の条件が詳細に述べられているほか、害虫の生息状況の確認方法や調査データの読み取り方なども図表と具体例とを織り交ぜて説明されている点が実用的で参考になる。燻蒸ひとつをとっても複数の方法が長短ともに紹介されているため、各々条件の異なる資料や施設に応用しやすい。これまで継続的な害虫防除管理を実践されてこなかった既存の施設でこそ、どのように対応していくべきか、本書の情報が役に立つ。まさに、実践のためのハンドブックである。

本書の構成・頁数は、以下のとおりである。

- 1章 昆虫とは (15頁)
- 2章 博物館にいる害虫の種類 (34頁)
- 3章 推奨される害虫防除

—IPM (総合的有害生物防除管理)— (12頁)

4章 IPMとしての害虫の防除と駆除 (50頁)

5章 殺虫剤による害虫駆除 (12頁)

6章 カビ・ダニ・小動物の被害防除 (20頁)

7章 生物被害が置きにくい博物館建築 (20頁)

冒頭の2章は昆虫類、6章は真菌類・小動物類についてその種類と生態、生息環境に関する詳細が述べられる。実に1/3近い分量が被害をもたらす要因となる生物の説明に充てられている。3章ではIPMの理念と博物館等で採用されるに至った経緯、そしてその手順が、4・5章では具体的な手法が紹介される。7章では博物館建築について動線やコスト等の問題も含めて言及されている。巻末には、各々の施設が独自のIPMを実践しうるための数々の情報がまとめられている。

わたしは、十数年前に縁あって中米某国の国立博物館にて展示保存修復と収蔵環境の改善活動に数年間従事する機会をもった。ネット環境も未整備な言語の違う国にあって、乏しい知識と経験を補充し即時的な情報を得るために厳選して持ち込んだ書籍のひとつが本書であった。辞書を除けば即実践を求められる現地にて最も重宝した文献であった。

10年前と比べ、IPMという用語は大きく浸透した。著者の杉山氏をはじめ第一線の研究者が開催する全国規模のIPMの講習会も開催されている。2009年には、本書の後継版ともいえる『博物館・美術館の生物学—カビ・害虫対策のためのIPMの実践—』(雄山閣)が出版されており、特にカビについてより詳細な生態と防除のための方策が述べられている。併読すべき文献である。

遺物を扱い、収蔵施設の管理に多少なりとも関わっている立場にある方はぜひ一度、本書を片手に小さな空間からでもIPMの手法を実践してみることをお勧めする。我々によって再び現在の空気に触れた過去のモノを、考古学資料として現状保存し次世代へと伝えていくためには、現代の保存環境についてもコンテキストをはっきりと把握して眺めてみる必要があると思う。モノの存在を維持していく環境を整えるということがいかに重要であるかを身をもって経験することで、ひいては資料とはなにか、何のために記録し収蔵保管し展示して論じるのかということに改めて立ち返る機会をも得るだろう。

## アルカ通信 No.134

発行日 2014年11月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : <http://www.aruka.co.jp>